

(イギリス藻学会会誌 *British Phycological Journal* を受け継いだ形で) を刊行したのは1993年であり、これを契機にヨーロッパの藻類研究者が一堂に会したヨーロッパ藻学会議の第一回大会がドイツの Köln で開かれたのが1996年であった。今回は第2回の会議であり、参加者の便を考慮して応用藻学の国際コンファレンス *International Conference on Applied Algology (8th ICAA)* と会期を連続させて開催するという。内容は1998年5月に送付予定の1stサーキュラーに掲載とのことであるので、参考までに第1回のシンポジウム等の主なテーマを挙げる。1) 汚染指標生物としての藻類、2) 藻類の寄生、3) 藻類の生活史、4) 藻類の集団遺伝学、5) 藻類の生化学、6) 気生藻類と土壤藻類、7) 藍藻類と藻類の毒性物質、8) 海産大形藻のバイオテク

ノロジー、9) 藻類の光合成と海洋の循環及び大気の放射熱など。

Web page <http://www.area.fi.cnr.it/icaa.htm>

問合先:

EPC2 Secretariat: Prof. Francesco Cinelli, Dipartimento di Scienze dell'Uomo e dell'Ambiente, Università di Pisa.

Via A. Volta, 6, I-56126 Pisa, Italy (Tel: +39 50 23054, Fax: +39 50 49694, E-mail: cinelli@discat.unipi.it)

8th ICAA Secretariat: Prof. Mario Tredici, Dipartimento di Scienze e Tecnologie, Alimentari e Microbiologiche, Università di Firenze.

P. le delle Cascine, 27, I-50144 Firenze, Italy (Tel: +39 55 3288306, Fax: +39 55 330431, E-mail: tredici@csma.fi.cnr.it)

追 悼

津村重舎氏の逝去を悼む

Mr. Jusha Tsumura (1908 — 1997), the Counselor of Tsumura & Co.

平成9年7月12日津村重舎氏の突然の訃報に接し、本誌の最も有力な後援者であり、かつ理解者を失ったことを心から残念に思う次第です。ここに深く哀悼の意を表し御冥福を祈ります。

故津村重舎氏は、明治41年9月5日先代重舎氏の長男として生を受けられました。先代重舎氏はいうまでもなく津村順天堂(現(株)ツムラ)の創業者であります。戦前貴族院議員として国政に参画されると共に基礎科学者の仕事にも深い理解を示し、特に家業の薬草、生薬に関連して植物分類学者牧野富太郎博士を後援して本誌の創刊が実現したのであります。

故2代目重舎氏は昭和9年3月慶応義塾大学経済学部を卒業と共に家業を継ぎ、先代重舎氏亡きあとは昭和16年(株)津村順天堂社長、会長として伝統生薬製剤から、今日わが国漢方製剤界を主導する(株)ツムラへの発展に寄与されました。なお平成7年には同社取締

役相談役の任にありましたが、広く各種製薬団体特に全国家庭薬協議会会長、日本製薬団体連合会副会長、東京生薬協会会長、(財)日本漢方医学研究所理事長等の要職を歴任、漢方生薬の普及に務められたことはよく知られています。故重舎氏はまた津村研究所に於ける基礎的な薬用植物学、生薬学の研究を後援しその発展に多大の寄与を示されましたが、特に70余年の歴史を担う植物研究雑誌の刊行に対しては常に変らぬ財政的精神的後援を惜まず生涯続けて来られたことはわれわれの深く感謝するところであります。

なお故津村重舎氏の社会的貢献に対しては藍綬褒章(保健衛生功労者)(昭和46年)勲三等瑞宝章(昭和53年)等が授与されています。

Mr. Jusha Tsumura was successively filled posts of the director, the president, the chairman of the board of directors and the counselor of Tsumura & Co. of which Tsumura Laboratory is



Mr. Jusha Tsumura (1908 — 1997), the Counselor of Tsumura & Co.

under the control. He strongly supported the publication of the Journal of Japanese Botany

not only financially but also morally.

(植物研究雑誌編集委員会代表 柴田承二)

新刊

□田中 馨：花と昆虫がつくる自然 197 pp. 1997. 保育社エコロジーガイド. ¥2,400.

前著「花生態学入門 (1993) に続くもので、この分野の研究者としてだれもがその実績を認める著者の、新しい知見をとりこんだ記述が各所に披露されている。見開き2頁がカラー写真 (そのほとんどが見事な接写)、次の見開き2頁がそれをテーマにした解説である。尾瀬ヶ原での調査結果などは得難いものである。前著では花の送粉機構に重点があったが、本書ではそれに加えて、表題のとおり、昆虫と花の重なり合った相互関係、さらにそれを保証するための多様な環境の重要性がしばしば言及されおり、アメニティー優先の「自然

型環境開発」の問題点を指摘するものとなっている。海水浴場の開発で減少するゲンバイヒルガオと、固有種オガサワラクマバチの保護が関係するなどということは、辛抱強い観察の末でなければ発想できないものだろう。同じく小笠原のムニンネズミモチがほとんど結実しない原因は、訪れる昆虫がいないこと、その理由は導入されたセイヨウミツバチの強力な集蜜能力に対抗できず、島に本来いたハナバチ類が減少したため、というような推理も、訪花昆虫0という、一見むなしい観察結果からもたらされたものである。東京白金の自然教育園に、距のない奇形のツリフネソウが増えているというはなしも、たいへん暗示